

日本語学習者の言語学習ストラテジーと音声評価の分析

—上級レベルの中国語母語話者を対象に—

馬 若君・鮮于 媚

【キーワード】

学習者音声、言語学習ストラテジー、発音評価、内省調査

【要旨】

本研究は、中国語を母語とする日本語上級学習者の言語学習ストラテジーに関する事情を明らかにすることを目的とし、言語学習ストラテジーと発音評価との関係を調べた。調査は、オンライン上で初対面の母語話者と日本語学習者間で会話を実施、発音学習ストラテジーの調査、専門家による項目別の発音判定調査を行った。調査の結果、自己評価型ストラテジーの項目のうち「自分の発音をいつも意識して発音している。」「自分の発音の弱点をいつも意識している。」というストラテジーと発音評価の間で有意な相関関係があった。この結果は、学習者の意識化が発音評価にも重要であることが示唆される。また、学習ストラテジーや自己評価の結果から、発音学習に対する意欲や自己評価意識は高いものの、具体的な学習方法が定着していないことが分かった。このことから、自己意識化につながる学習方法の開発が必要であることが示される。

1. はじめに

中国における日本語学習者数は、2018年に100万人を超え、増加傾向である。日本語で円滑なコミュニケーションも重要な項目の一つとなり、中国における日本語の発音指導は、日本語教師にとっても課題であると指摘されている（劉 2014）。また、中国の現状の一つとして、多くの日本語学習者が大学に入ってから学習を始めることがある。つまり、臨界期を過ぎてから学習を開始し、さらに言えば、学習環境やニーズによって多様な学習方法で日本語を学習している状況であり、その実態の把握が難しい。

そこで、本研究は、多様な学習方法を用いて上級学習者、すなわち、日本語能力試験¹のN1（以下、N1）に合格をした学習者はどのようにして日本語音声学習をしてきたのかについて調べることにした。これらの調査を行うことで、中国の日本語音声教育にも応用可能な知見を得られる可能性があるのではないかと考える。

¹ <https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html> にレベルの詳細がある。

2. 先行研究

2-1 日本語を専攻とした中国人学習者の音声に対する意識及びニーズ

日本語を専攻とした中国人学習者の日本語音声に対する意識調査について、鐘ほか(2020)²、劉(2011、2012)が挙げられる。具体的な内容については次の通りである。

まず、鐘ほか(2020)は、中国湖北省にある二つの大学の102名日本語を専攻とする学習者を対象に音声意識の調査を行った。調査対象は全員が大学に入ってから日本語の勉強を始めた学生である。調査の結果、学習者の日本語アクセント意識の成長はもつとも困難であり、常に低いレベルに止まっていることが明らかになった。

次に、劉(2011)は中国上海の三つの大学の日本語を専攻とする学習者68名に対して、発音学習のニーズについて調査した。調査の結果、日本語の発音をもっと勉強したいというコメントが最も多く、日本語を専攻とした中国人学習者は発音学習に対するニーズが高いという結果が得られた。そして、劉(2011、2012)では、中国人学習者に音声の重要性について調査した結果、「音声教育が必要か」という質問に対して、協力者全員が「必要である」と答えていると報告されている。

これらの先行研究から、中国の日本語学習者には音声教育が必要とされているだけでなく、それに対するニーズも高いということがわかる。音声意識が低いレベルに止まったことに対して、音声に関する指導を増やすべきではないかと考えられる。

2-2 中国の日本語音声教育現状および問題点

中国の日本語音声教育現状について、主に、劉(2014)、李(2015)、李(2018)、呉(2015)、高・呂(2020)が挙げられる。まず、劉(2014)は学習者の日本語発音のニーズが多いという現状に対して、体系的発音指導がおこなわれている教育機関が少ないと指摘した。同様に、李(2015)も以下のように述べている。

「中国で日本語専攻を設けた高等教育機関には、日本語音声に関する課程は少なく、基礎日本語課程では音声を指導する授業を増設したが、全体の育成プログラムでは重視されてない」(李(2015)の内容の一部抜粋；下線は筆者による訳)。

つまり、中国の現状を鑑みると日本語学習者の音声学習のニーズがあっても体系的発音指導が行われている教育機関が少ないという現状であることが示唆されている。

ここからは発音指導の役割を担う教員はどのような現状なのかを検討する。日本語の発音指導は、日本語教師にとっても難点であることが明らかにされている(劉2014)。音声教育方法について、李(2018)は今までの日本語音声教育はいわゆる「真似中心」で、日本語音声学習については初級者から音声学的理論の伴う発声方法と発声訓練を合

² 鐘ほか(2020)は、钟勇・李莹・赵寅秋(2020)「中国日语专业学习者的日语语音意识发展模式」『日语学习与研究』1, pp.89-94(原文中国語)の内容を指す。

わせて進めるべきことが指摘されている。中国の高等教育機関の音声教育はほとんど基礎日本語の授業に集中しているが、体系的な音声理論の知識は高学年の言語学概論の授業で学び、日本語の音声学習を短時間で完了させるよう求めている（高・呂 2020）。

具体的に、呉（2015）は、日本語音声学習の難点が生じる原因の一つは、音声表記のミスリードであり、教師は表記の実際の発音だけでなく、実際の音声と中国語がどのように対応しているかを把握しておくことで、より効果的に音声学習を支援することができるかと述べている。

以上の先行研究が示しているのは日本語の発音の指導を行う場合、発音指導時間が短く、発音指導方法が単調であるなどの問題があり、学習者は日本語の音声学習を短時間で完了するよう求められる一方で、学習者のニーズに合った指導を受けておらず、日本語教師がいかに適切な指導を行うかはまだ議論されている。筆者は、学習者の学習状況を把握した上での日本語音声教育を検討する必要があると考えた。

2-3 言語学習および発音学習ストラテジーに関する先行研究

日本語学習者の言語および発音学習ストラテジーに関する研究は、木下・戸田（2005）、戸田（2006）、小河原（1997）、スィリポンパイブーン ユパカー（2008）、須藤（2013）が挙げられる。

小河原（1997）は自己再認できる学習者ほど発音もできていると述べた。つまり、「自己評価」ができる学習者ほど、発音能力が高い傾向にある。スィリポンパイブーン ユパカー（2008）では、79名の学習者に対してアンケート調査と読上げた録音を分析した結果、自己モニター型ストラテジーがアクセントの習得に有効であることが示唆された。須藤（2013）では、日本語音声教育は学習者が音声学習に対する動機づけを高める必要があると述べられている。

以上の先行研究から、優れた学習者は自己評価、自己モニター型ストラテジーを用いて言語学習をし、そして、学習者の動機付けも日本語音声教育と密接に関わっていると報告された。

しかし、これらの結果は近年、増加傾向である中国人学習者を対象としていないため、同様な傾向があるかどうか確認をする必要がある。そこで、本研究は、戸田（2006）で実施した言語学習ストラテジーを用いて、中国人学習者に実施し、従来の研究の内容と比較を行うことにした。

2-4 研究目的および範囲

本研究は、中国語を母語とする日本語上級学習者（以下、CJL）の発音学習に対する実態を把握するため、次の研究要素を用いて、検討する。

- 1) N1 を合格したいいわゆる、上級日本語学習者がどのように発音学習してきたのか。

特に、発音学習ストラテジーの使用と音声コミュニケーションにどのようなストラテジーを持っているのか。

- 2) 学習者の音声学習ストラテジーと専門家による発音評価間で相関関係を検索し、評価が高い学習者が用いる音声学習ストラテジーについて調べる。

3. データ収集：自由会話の収録と言語学習ストラテジー調査

データは、1) 日本語母語話者と日本語学習者の会話の収録、2) 日本語学習者を対象とした日本語音声学習ストラテジー調査、3) (1) で得られた発話データに対する発音の評価、4) (1) の会話の終了後、フォローアップ・インタビュー調査である。具体的な方法は次の通りである。

3-1 調査協力者

調査協力者は日本語母語話者と日本語学習者を合わせて 21 名である。日本語母語話者（以下、NS）は 20 代から 30 代の男女計 7 名で、内訳は男性 1 名と女性 6 名、年齢は 20 代 6 名、30 代 1 名である。CJL は全員 20 代で、日本語学習開始年齢は 17 歳以降である。留学経験がある学習者 7 名と留学経験がない学習者 7 名で、合計 14 名である（表 1）。全員 N1 に合格している。

表 1 調査協力者の情報

日本語学習者 (CJL)	日本語学習歴	留学経験	出身地
CJL1	5年以上	あり	黒竜江省
CJL2	4年	なし	浙江省
CJL3	5年以上	あり	浙江省
CJL4	4年	なし	遼寧省
CJL5	5年以上	あり	江蘇省
CJL6	5年以上	なし	河北省
CJL7	4年	なし	台湾
CJL8	4年	あり	湖北省
CJL9	5年	あり	遼寧省
CJL10	5年以上	なし	山東省
CJL11	5年以上	あり	福建省
CJL12	5年以上	あり	福建省
CJL13	5年以上	あり	新疆ウイグル自治区
CJL14	3年	なし	江西省

3-2 母語話者と日本語学習者の自由会話

本項では、自由会話のデータ収集方法を述べる。本調査は、コロナの影響により対面での会話は実施することが難しく、オンラインの Web 会議システムを利用し、実施した。方法は、初対面である NS 1 名と CJL 1 名で、“最近気になるニュース”をテーマにし、話すことにした。NS は、基本的に 2 名の CJL と会話することになる。

3-3 音声学習ストラテジー調査

調査協力者、CJL は、自由会話の実施後、内省調査および言語学習ストラテジー調査を実施した。言語学習ストラテジー調査は木下・戸田（2005）、戸田（2006）で使用したストラテジー調査を利用した（参考資料）。言語学習ストラテジー調査は言語学習ストラテジーに関する 11 のカテゴリーがあり、各々の項目に具体的なストラテジーが下位項目として存在する。下位項目は合計して 56 項目である。CJL は、すべての項目について「どの程度使用もしくは同意³しているのか。」を 0%～100%の範囲で数値化し、答えてもらった。

3-4 音声学専門家による発音評価

発音の評価と学習ストラテジーの関係を調査するという目的から、音声学専門家による発音評価を実施した。3 名の専門家⁴（以下、NT）は、日本語教育の経験があり、日本語音声学を専門とし、発音の授業を担当したことがある条件であった。

評価は、録画された動画から CJL の音声を 2 分間切り出した音声に対して、1) 聞き取りやすさ、2) 明瞭度、3) イントネーション、4) アクセント、5) リズム、6) 区切りといった 6 項目で評価してもらった（表 2）。

³ 項目によって「書かれた文に対してどの程度同意しているのか」について書いてもらう場合と「実際音声学習時に使用する程度」について書いてもらう場合がある。いずれの場合もパーセンテージに表記してもらった。

⁴ 本研究の調査目的と関連し、評価者として発音の評価ができることを優先した。そのため、上述した条件以外は経歴がそれぞれ異なる。1 名は韓国語母語話者であり、日本語音声学専門家である。もう一人は日本語母語話者で元アナウンサーであった。そして、もう一人は日本語母語話者で日本語教師歴 20 年の経歴を持ち、発音授業を長年担当していた。

表 2 発音評価の評価項目と評定範囲

評価項目	評定範囲
(1) 聞き取りやすさ	1-10 段階評価
(2) 明瞭度	1-5 段階評価
(3) イントネーション	1-5 段階評価
(4) アクセント	1-5 段階評価
(5) リズム	1-5 段階評価
(6) 区切り	1-5 段階評価

4. 分析および結果

4-1 分析方法

音声学習ストラテジーと発音評価をとの関連を明らかにするために次のような手続きを行った。CJLによる言語学習ストラテジーおよび発音評価値のZ-score変換⁵を実施、得られた言語学習ストラテジー値と発音評価値間の相関関係⁶の計算し、言語学習ストラテジーの有意な項目を抽出した。

4-2 発音評価と言語学習ストラテジーの関係

表3は、発音評価値と言語学習ストラテジー間の有意なプラス相関関係の結果があった項目である。例えば、4-4の「日本人と一緒に仕事や勉強がしたい」という項目に対して高い同意度を示した回答とアクセントの評価値には、5%水準の有意差があり、その相関の程度は、 $r=0.59^7$ であることを示す。

⁵ Z-score は、平均値からのばらつきを測るための値で正規化に用いる手法である。今回は、3名の専門家による評価者の点数があり、(評価点-平均) ÷ 標準偏差で計算した。同様に言語学習ストラテジーも (使用度-平均) ÷ 標準偏差で計算した。

⁶ 相関関係の統計処理は、IBM SPSS を利用した。

⁷ 相関係数は $-1 < r < 1$ の範囲となり、 r の値が 1 に近いほど強い相関があると分析する。一般的には、 r の値は 0.0~0.20 までは相関がなく、0.20~0.40 までは弱い相関、0.40~0.70 は中程度の相関、0.70 以上は強い相関とされる場合が多い。本稿では、有意な相関関係があった場合、すべての項目を示すことにした。

表3 言語学習ストラテジーの項目と発音評価間で有意な相関関係のある項目

4. コミュニケーション意欲	
4-4 日本人と一緒に仕事や勉強がしたい	アクセント (r=0.59, p<0.05)
4-5 日本人と友達になりたい	アクセント (r=0.59, p<0.05)、 聞き取りやすさ (r=0.56, p<0.05)
6. 発音体裁感	
6-1 他の学習者や日本人に笑われないような発音で話したい	聞き取りやすさ (r=0.57, p<0.05)
7. 自己評価型ストラテジー	
7-2 自分の発音の弱点をいつも意識している	聞き取りやすさ (r=0.56, p<0.05)
7-3 自分の発音をいつも意識して発音している	イントネーション (r = 0.66, p<0.05) リズム (r=0.64, p<0.05)、 聞き取りやすさ (r=0.69, p<0.01)
7-5 自分が前よりどのくらい発音がうまくなったか確認する	アクセント (r=0.63, p<0.05)、 リズム (r=0.61, p<0.05)、 区切り (r=0.6, p<0.05)、
7-6 教師からの発音のアドバイスや説明を利用する	明瞭度 (r=0.67, p<0.05)
9. モデル聴取ストラテジー	
9-1 自分で何度も繰り返し発音する	アクセント (r=0.57, p<0.05)、 区切り (r=0.77, p<0.05)、
9-3 何度もモデル発音を聞いて発音のイメージを覚えて発音する	区切り (r=0.65, p<0.05)

表3の結果から、言語学習ストラテジーと発音の評価との関係で、56項目中、9項目が発音評価とプラス相関関係があることがわかる。このことは、9項目に対して、同意もしくは使用した学習者は、発音の評価値と相関があることを示す。中でも、第7カテゴリーである「自己評価型ストラテジー」は、4つの項目が有意な相関があった。また、第9カテゴリーである「モデル聴取ストラテジー」にも2つの項目が有意な相関関係があった。いずれの場合も、自分で意識をすることと評価値との有意な相関がある。これらのことは、自分で意識して発音をする学習者ほど発音の評価値が高かった結果である可能性を示唆する。

5. 内省調査で見られた発音に対する自己評価

内省調査は筆者とCJLの一对一で行った。方法としては、母語話者と自由会話をし

た際に録画した動画を見ながら、気になったところの部分を一旦停止し、自己評価および発音に関する内省を話してもらった。すべての内容は中国語で行った。所要時間は一人あたり15分～20分であった。その後、中国語のデータを文字化し、日本語に訳した。以下は、筆者により中国語から日本語に訳したデータから発音評価項目と関連のあるコメントを分類したものである。

【聞き取りやすさについての自己評価】

- 自分が話すときに、口が開いていない感じして、聞き取りづらと思います。
- 自分の話は途切れ途切れで、しかも、発音を強くした感じがあり、アクセントも聞きづらいです。

【長音についての自己評価】

- 長音をしっかり発音すると、話のスピードが遅くなると思って、早く話したいと思えば長音が促音になっていることもあります。
- 話速が速いので、基本的に長音が足りない。
- アクセントと長音の問題が多いと思います。
- たまに、長音の言い間違いがあります。例えば、旅行（りょこう）を「りょうこう」に言い間違えていました。

【イントネーションについての自己評価】

- イントネーションの起伏がいきなり、あるいは穏やかすぎるということに気づきました。
- 母方言に影響されたと思います。特にイントネーションやアクセントが中国の東北方言に似ています。
- 日本語に慣れていないので、どんな感情で話すのかわかりませんし、イントネーションが把握できませんでした。

【アクセントについての自己評価】

- 長い間、日本語で話してなかったので、自分のアクセントがおかしいと思いました。
- アクセントと長音の問題が多いと思います。
- 自分は片言で話していますので、単語と単語の間を接続した時のアクセントがおかしいし、文とは言えない。
- アクセントの言い間違いが多いと思います。名詞を強調したくて、そこで区切りを入れたのですが、そこで、強いアクセントを入れてしまって、母語でもこういう癖があります。
- アクセントも問題があります。例えば、コロナウイルス。二語以上の単語が結合した慣用語のアクセントを迷っています。

【母語、母方言の影響についての自己評価】

- 日本語の発音が中国語と似ている発音であれば、その単語を発音するのを避けたいです。なぜなら、似ている発音を中国語の発音にすると発音は完全に間違いだが、日本語の発音にすると、自分はなんか不自然だと思い、結局、発音がおかしくなりました。
- 自分の発音は外国人の発音に聞こえるし、しかも、中国人の発音に聞こえました。
- 語頭の発音が強く、声も小さいです。母方言に影響されたと思います。特にイントネーションやアクセントが東北方言に似ています。
- 山東方言に影響された原因もあり、自分が話す時、いつも強く発音をします。
- アクセントを間違えたところが多いと思います。名詞を強調したくて、そこで区切りを入れたのですが、そこで、アクセントを強く入れてしまって、母語でもこういう癖があります。

【区切りについての自己評価】

- 整った文を話す習慣がなく、いつも区切りのところが句末になってしまう。

その他、学習者は「母語話者より強く発音」、「「タ行」の発音が苦手」、「促音をはっきり言えなかった」、「カタカナ語の発音がうまくできない」、「発音が伸びている」などの自己評価もあった。発音中心の自己評価からは、アクセントが気になった学習者が最も多く、その次に、母語あるいは母方言に影響されていると思った学習者が多かった。また、母語や母方言の影響を否定的に捉えている傾向が見られた。ある学習者には、母方言と似たような発音に戸惑い、日本語の発音の方法に迷っていたという自己評価もあった。共通している点としては、日本語の発音の学習項目に対する知識はあるものの、どのように学習すべきなのか、もしくは、学習ストラテジーを用いるのかについては明確な方法を持っていない場合が多かった。

6. 総合考察および今後の課題

本稿では、言語学習ストラテジーと発音評価値がどのような関係があるのかについて調べた。特に、上級学習者と分類される N1 合格者の多様な発音学習状況を把握するため、中国語母語話者を対象とし、調査を実施した。その結果、プラス相関関係が見られた項目は 4-4 「日本人と一緒に仕事や勉強がしたい」、4-5 「日本人と友達になりたい」、6-1 「他の学習者や日本人に笑われないような発音で話したい」、7-2 「自分の発音の弱点をいつも意識している」、7-3 「自分の発音をいつも意識して発音している」、7-5 「自分が前よりどのくらい発音がうまくなったか確認する」、7-6 「教師からの発音のアドバイスや説明を利用する」、9-1 「自分で何度も繰り返し発音する」、9-3 「何度もモデル発音を聞いて発音のイメージを覚えて発音する」という項目で有意な相関関係があった。

今回の結果は、他人の評価や修正より自己評価および自己修正を行う学習ストラテジーを持つ学習者ほど発音の評価が高かった結果と言える。今回の結果は、小河原（1997）やスリポンパイブーン ユパカー（2008）の「自己モニター型ストラテジー」が発音学習に有効であるという結論と一致する結果である。また、戸田（2006）の「発音の達人」のフォローアップ・インタビュー調査の結果とも類似していることが多く、「意識する」ことと、自らの自己評価を行い、自己修正をすることが発音の学習にも影響を与えた可能性が示唆された。

今回の結果から、今後の発音教育の方法について自己評価型ストラテジーが活用できるような学習方法の探索も必要であると考え。しかしながら、今回の言語学習ストラテジー調査は、あくまでも学習者自身がストラテジーの使用に関するアンケート調査であるため、実際どのように使っているのかについて確認が難しい。また、言語学習ストラテジーを使って発音が上達したのかどうかについてもより詳細な調査が必要であると考え。今後は人数を増やし、幅広いレベルでの調査が必要であると考え。

付記

本研究は馬若君の『中国語を母語とする日本語学習者の音声学習実態とその多様性に関する研究—初対面会話の内省調査と学習ストラテジーを中心に—』の一部を修正したものです。本研究の一部は「埼玉大学より戦略的研究センター・インキュベーション研究グループ（日本語学・日本語教育研究グループ）」の助成によるものです。

参考文献

- 李彩蘭(2018)「中国語話者における初級日本語音声教育」『花園大学文学部研究紀要』50, pp.1-11
- 小河原義朗(1997)「外国人日本語学習者の発音における自己評価」『教育心理学研究』第45巻 第4号, pp.72-82
- 木下直子・戸田貴子(2005)「発音が上手になる学習者の特徴—学習開始年齢と到着年齢を中心に—」『早稲田大学日本語教育研究』第7号, pp.153-163
- 戸田貴子(2006)「「発音の達人」とはどのような学習者か—フォローアップ・インタビューからわかること—」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成16年度～17年度 科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C)(2) 課題番号16520357, 平成18年3月, pp.19-68
- 須藤潤(2013)「日本語音声教育における動機づけの意義とその可能性—「学習者間の協力」に関する事例的考察—」『コミュニカーレ』2号, pp.43-70
- スリポンパイブーン ユパカー(2008)「日本語アクセントの学習における自己モニターの有効性—タイ語母語話者に対するアンケートの分析から—」『音声研究』12(2), pp.17-29
- 劉佳琦(2011)『日本語有声無声破裂音の習得及び教育』新星出版社
- 劉佳琦(2012)『日本語の動詞アクセントの習得』新星出版社

- 劉佳琦 (2014) 「中国における日本語音声教育の現状と課題 —復旦大学日本語学科の取組みから—」『早稲田日本語教育学』(14-15-16), pp.105-116
- 李嬌 (2015) 「高校基礎日语教学语音教学探析」『苏州教育学院学报』32, No.3, pp.86-89(原文中国語)
- 高淑娟・吕春媚 (2020) 「日语语音教学模式的探索与实践」『东北亚外语论坛』, pp.93-100 (原文中国語)
- 吴晓莉 (2015) 「中国学生日语语音学习的难点分析与对策」『时代教育』10, p.175 (原文中国語)
- 钟勇・李莹・赵寅秋 (2020) 「中国日语专业学习者的日语语音意识发展模式」『日语学习与研究』1, pp.89-94 (原文中国語)

【参考資料】

言語学習ストラテジー調査時に用いた質問

(戸田 (2006) pp. 24-26 の内容を引用し、筆者によるフォーマットの一部変更)

1. 発音に対する将来的展望
① 将来今より日本人と上手に会話ができるようになると思う。
② 将来今より日本語の発音が上手くなると思う。
③ 将来今より正確で自然な日本語で話せるようになると思う。
④ 将来今より正確に私の思っていることを日本人に日本語で伝えることができるようになると思う。
2. 道具的動機
① 日本語が話せるようになって日本で働きたい。
② 日本語を使った仕事につきたい。
③ 日本語が話せると就職に有利である。
④ 日本語は私が自国で仕事をするために必要だと思う。
3. 発音向上意欲
① 日本語の発音が上手になるために努力したい。
② 現状に満足しないで少しでも正確な発音を目指して努力したい
③ 発音の授業や発音の指導を増やしてほしい。
④ 日本語学習の中で発音の習得は非常に重要である。
4. コミュニケーション意欲
① 帰国しても日本語の勉強を続けたい。
② 日本人に日本語で私の思っていることを伝えたい。
③ 日本人と日本語で話がしたい。
④ 日本人と一緒に仕事や勉強がしたい。
⑤ 日本人と友達になりたい。

<p>5. 統合的動機</p> <p>① 他国の学習者と日本語で話し合えるような発音を身に付けたい。</p> <p>② 帰国しても機会があればまた日本に戻ってきて日本語を勉強したい。</p> <p>③ 日本語の勉強が好きである。</p> <p>④ 日本語や日本文化に興味がある。</p>
<p>6. 発音体裁感</p> <p>① 他の学習者や日本人に笑われないような発音で話したい。</p> <p>② 日本で生活するために正確な発音で話す必要がある。</p>
<p>7. 自己評価型ストラテジー</p> <p>① うまく発音できているかいつも意識している。</p> <p>② 自分の発音の弱点をいつも意識している。</p> <p>③ 自分の発音をいつも意識して発音している。</p> <p>④ アクセントやイントネーションに気をつけて発音する。</p> <p>⑤ 自分が前よりどのくらい発音がうまくなったか確認する</p> <p>⑥ 教師からの発音のアドバイスや説明を利用する。</p> <p>⑦ 教師やテープの発音を真似する。</p> <p>⑧ 自分で自分の発音に納得するまで自分の発音を修正する。</p> <p>⑨ 発音の上手な友人がなぜ上手なのか考える。</p>
<p>8. 目標依存ストラテジー</p> <p>① 発音の目標が達成できたら次の目標を立てて練習する。</p> <p>② 教師や友人にどうやって発音するのか教えてもらう。</p> <p>③ 目標を持って発音を練習している。</p> <p>④ 発音の教材や参考書を読んだり、利用する。</p> <p>⑤ 普段気がついた時はいつでも1人で発音の練習をする。</p> <p>⑥ 少しずつ変化させて発音を修正する。</p> <p>⑦ 発音の目標が達成できたかどうか確認する。</p> <p>⑧ 自分の発音が正しいかどうか誰に聞く。</p>
<p>9. モデル聴取ストラテジー</p> <p>① 自分で何度も繰り返し発音する。</p> <p>② LL やテープレコーダを利用して発音を練習する。</p> <p>③ 何度もモデル発音を聞いて発音のイメージを覚えて発音する。</p> <p>④ 自分の発音とモデルの発音がどう違うか考える。</p> <p>⑤ 日本語の教科書を声に出して読む。</p> <p>⑥ 教師や日本人に自分の発音を直してもらう。</p> <p>⑦ 平仮名1音1音注意深く発音する。</p>
<p>10. 口意識型ストラテジー</p>

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 教師の口元を見て発音を真似する。② 舌や唇など口の中を意識して発音する。③ 発音練習のときは大きな声ではっきりと発音する。④ 他の学習者の発音と自分の発音を比較する。⑤ 教師に発音を直されたら、直される前の発音と異なった発音をしている。 |
|--|

<p>11. 他者意識型ストラテジー</p>

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 自分が発音しているとき、自分の発音を聞いている相手の反応を気にする。② 下手だと思ったり、間違いだと思ったら言い直して発音する。③ 日本人や他の学習者からの、自分の発音に対する評価を気にする。④ 母語と日本語で発音の類似点相違点を比較する。 |
|---|

馬若君（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

鮮于媚（埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授）